

---

# 天使《ドミニオン》の産声

高田高

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

ドミニオン  
天使の産声

### 【Nコード】

N8229D

### 【作者名】

高田高

### 【あらすじ】

遙か遠い未来。地球外生命体、通称ビジターと戦う退治屋。退治屋の一人、刹が暮らす片田舎は、未来とは思えない、タイムスリップしたような古風な町だった。袴に羽織りにエネルギー銃！？ちよっと変わったSF和風ファンタジー。

前 退治屋（前書き）

作中少々いかがわしい部分がありますが、R指定しない程度のや  
んわりしたものです。一応伝えておきます。

## 前 退治屋

今より遙か未来

突如出現した地球外生命体、通称ビジター。

ビジターの襲撃はあまりに突然で、人々は、都市は、文明は呆気なく崩壊し、地上から人が消えた。

しかし、人間もバカではない。地下に避難した人々は、残された僅かな資材から、対ビジター用兵器を開発した。

空気中に漂う窒素をエネルギーに変換し、高エネルギー体を打ち出す兵器。

姿形は長身銃だが、重量は拳銃より遙かに軽い。

その名は、ドミニオン

ドミニオン完成から数百年。ビジターとの戦いにより、人間は徐々にではあるが生活領域を取り戻していた。

当然、文明は崩壊してしまったため、一から作り直している。

元日本列島、現フロンティア16。

フロンティア16とは、ビジターから16番目に奪取した地域、と言っなんともわかりやすい理由から付けられたネーミング。ネーミングに対するセンスまでも、文明とともに崩壊していたのか、それは定かではない。

フロンティア16、通称ジュウリクは古風な瓦屋根の家屋が並ぶ、

到底化学が進んだ未来とは思えない町並み。着物、生活習慣、風習から、更には言語まで昔の日本のものを採用している。

その理由と言うのが、現ジュウリク大陸將軍、義久・L・太吉郎よしひさ・エランドル・たきちろうの『規律を重んじた時代』を指した故だとか。実際は義久の趣味だろう。

一方で、エネルギー銃ドミニオンを扱いビジターを退治し、一方で、着物に袴、鬘まげを結った者達が街道を歩く。おかしな世界だ。

ジュウリクの片田舎、信都しんとと呼ばれる町に一人の退治屋が暮らしている。

噂によれば、漂う気配は犬猫を払い、銃を構えただけでビジターが逃げ出す程だとか。更に、その退治屋は若い女だと言うから驚きである。

「……うん」

見た目からすると、十と四、五程の少女は、窓から差し込む陽光に目を覚まし、体を起こした。

少女の名は刹せつ。ジュウリクで知らぬ者無し、とまで言われるドミニオンの名手。

起き上がった刹の格好は、なんともはや、着物を腕に通しているだけで、前は開けっ広げ。はつきり言っただけで裸と大差ない。

自分の横に眠る、これまた素っ裸の男に目を向け、幸せそうに微笑むと、布団の脇に乱暴に放られた帯を手に取り、開けっ広げたまの着物の前を合わせ、帯を手早くかた結びに絞めて立ち上がった。少しよろけながら化粧台に歩み寄ると、そこに置かれた赤色の細い髪止めの紐を掴み、肩程まである黒髪を襟首でまとめ、紐で適当に括る。化粧台の鏡に横面よこめんを映し、髪が止められている事を確認す

ると、よし！ とつぶやき炊事場に向かった。

朝ご飯は、白飯を緩く炊いた粥飯と大根の漬物だけ。貧乏なわけではなく、理由は刹が料理下手であるためだ。

今更説明するものなんだが、刹は嫁いでいる。刹の横で寝息を立てていたのが旦那様。

嫁ぐまでは料理などはしたこともなく、包丁の扱いに関しては見ていられない程である。

しんなり漬かった細身の大根を、乱暴に叩き切りながらため息を一つ。

「たかだか刃物。どうしてこうもうまく扱えんのか。ドミニオンのようにはいかなあ」

刹は座敷に転がる二丁の長身銃を横目に、再びため息をついた。

「姉さん、おはようございます！」

「今日もやかましいな、良吉」

「つれない態度ですねえ。竜次郎の旦那と上手くいつてないんですかい？」

家の戸を開けて入って来たのは、仲渡しを生業にする良吉<sup>よしきち</sup>。

仲渡しとは、ビジターの退治依頼を退治屋に伝える仲介人の事だが、最近では依頼全てを施設側が管理しており、そこからこぼれた金にもならない様な依頼を探し、教える程度の仕事に成り下がってしまっている。

ちなみに良吉の言う竜次郎<sup>りゅうじろう</sup>とは、刹の伴侶の名前である。

「竜とはまあ、いつも通りだな。で、依頼か？」

刹はまな板に転がる大根をだん、だん、と包丁で豪快に輪切りにしていく。

「いえいえ、依頼取りの途中ですて。

あの……俺、代わりにやりましょうか？」

良吉は刹の危なっかしい包丁捌きに、下ごしらえを代わろうと言ったわけだが、その申し出に刹は首を振って拒否すると、良吉の方に向いた。

「いや、嫁いで二年、いつまでも嫁が料理下手では、竜にも、竜の家族にも恥だからな」

言っている事は立派だが、そう言いながら良吉に包丁の刃先を向けるのは、いかなものだろうか。

「わ、わかりましたよ。黙ってますから刃物を人に向けしないで下さいよー！」

刃先を向けていた事によく気付き、いつそう深くため息をつくと、まな板の方へ向き直り、再び大根を切りはじめた。

「はあー……。なんで私はこつも素行が雑なんだろうな。もっとこつ、女らしく出来れば竜も……」

刹の言った言葉が相当以外だったのか、座敷にいつの間にか上がっていた良吉は声を上げて笑った。

「姉さんが女らしく!？」

ムリムリ！ そんな事、世界がひっくり返っても無理で……っ！」

良吉は急に笑うのを止めた。それは、自分の首筋横を包丁が通り抜けて行ったため。

刹は雑に輪切りにされた大根を見つめたまま、振り向く事もない。

「悪い、包丁がすっぱ抜けた。怪我は無いか？」

そう言った刹の背中が放つ気配は、殺意以外言い表しようがない。良吉は、だ、大丈夫ですよー、と弱々しく言うが、大丈夫な顔色ではない。その時、刹の舌打ちが聞こえたのは恐らく気のせいだろう。

朝の用意が出来上がり、刹は座敷に敷かれた布団で今だ寝息を立てる竜次朗に近寄り、体を揺すって起こしはじめた。

「朝だぞー、起きろー」

耳元で声を掛けると、竜次朗は目を覚ました。しかし、どうやら寝ぼけているらしく、刹を抱き寄せ、乱暴に口付けした。

「んっ！？ んー！ んー！」

後頭部を押さえ付けられ、唇どころか顔を離す事すら許されず、かぶり付くように口付けをしている。

その光景に良吉はにやけるばかりで、竜次朗を引き離すなりしない。

実はこの行為、毎朝の事なのだ。

「んー！……ぷあ！」

竜！ いい加減に、ひやっ！？」

竜次朗は刹の着物の裾から片方の手を内側に突っ込むと、背中に回し逃げられないように抱きしめ、もう片方の手で下半身をまさぐりはじめた。

それを見ていた良吉は黙って退散。いくら助平な良吉であっても、夫婦の営みを邪魔するような野暮な事はしない。

「良、吉……たすけっ」

刹の願い虚しく、良吉は家を出ると、戸を閉めた。そこへ、近所に住む恰幅かつぶくの良いおばさんが現れた。

「おや、良吉さん。刹ちゃんに用事かい？」

あたしもね、ほら、畑で取れた野菜、持ってきたんだよ。

ところでなんで外にいるのさ？ 刹ちゃんいないのかい？」

「いや、いつもの……」

そう言っって入口の戸に横目を向けると、奥から刹の喘ぐ声が聞こえて来た。

家は少々厚めの板を組んだ造りで、防音性能など当然期待出来ない。そのため、声を上げれば外に筒抜け。

「あらー、若いっていいわねえ」

昼夜問わず刹の喘ぐ声が聞こえるのも、この辺りでは日常の事なのだ。

しばらくの後、家の戸を開けて良吉を招き入れたのは、ボロ雑巾のようにされた竜次朗。頬には真っ赤な手形が付けられている。

「良吉、待たせたか？」

「旦那、朝から元気なのはいいんですけどねえ、せめて客のいない時にお願ひしますよ」

良吉が玄関口をまたいで家に入ると、袴に羽織り姿の刹が足に脚半はんを巻いているところだった。

脚半とは、歩きやすいようにすねに巻き付け、紐で結ぶ布の事で、ゲートルとも呼ばれる。

「姉さん、もう準備出来たんですか？」

「ビジターどもは待ってくれんな。それに家に居ると、その、あれだ……」

口ごもらせながら刹は竜次朗を睨み付けた。

家でもたついていると、再び襲われかねないと言う事なのだろう。まったくもって、竜次朗は節操が無い。その節操の無さときたら、発情した動物など目じゃない。隙あらば、と言った感じだ。

「そんな怖い顔するなって。さて、俺も仕事の支度するかなつと」

竜次朗が座敷に上がるのとは逆に、刹は玄関口をまたいで外に出た。

天使《ドミニオン》の産声

「行つて来る」

「無理、するなよ」

《続く》

前 退治屋（後書き）

SF和風ファンタジーとか言いながら、和風なのはここだけです。結局何が書きたかったのかと言うと、銃と袴姿の女性です。適当でごめんなさい。 作中にあつた、いや〜んなシーンは、当初もつとガチにするつもりでした。はつきり言って18禁でした。が、ビジターや退治屋が薄れると感じ、少年ジャン レベルに抑えました。 次はもつとエロエロを書こうかな？

## 中 ビジター

刹と良吉は依頼を管理する施設、ドミニオンホール・ジユウリク支部に向かった。とは言っても、良吉は道が同じだけで、そこに用があるのは刹だけだ。

ドミニオンホールは、信都の建物と比べて外観から造りから全てが未来的で、半円形のドーム状。構成素材は外気、外光を著しく遮断する特殊加工を施した金属で出来ている。

施設規模は直径100m程度と、支部とは言え、ビジター対策組織にしては随分こじんまりしているように感じるが、組織自体は本部に数名の管理者が存在するだけで他はフルオートメーション。事務処理や調査に人間は必要無いのだ。

実のところ、今だに汗水たらしてあくせく働くのはジユウリクくらしいのもので、他の国はなにもかも機械まかせ。ジユウリクだけが異質文化なのである。

二人がドミニオンホール入口である銀色の扉の前に立つと、どこからか合成音であろう女性の声が聞こえてきた。

『声紋照合を行います。お名前をどうぞ』

「刹だ」

低い機械音が響くと、正面の扉はまるで幻だったように姿を消し、長い廊下が口を開けた。

『声紋確認、刹様おはようございます。依頼が71件届いております』

「姉さん、俺はここで！  
くれぐれも気を付けて下さい！」

良吉は手を振ると、古風な家屋が並ぶ町へと姿を消して行った。

「さて、行くか」

廊下へと踏み入ると、迷いなく目的地へと歩き出した。

刹が施設内に入っただけでしばらくすると、消えていた銀色の扉が再び姿を現し、口を閉じた。

施設内は何かから何まで全てが白く、それを壁内部に埋め込まれた発光剤が照らし、まるで外光が降り注いでいるように明るい。

照らす自工灯に、刹はしばらく眉をひそめると、目的の場所に向けて歩く速度を若干早めた。

「この灯、どうも好きになれんな」

つぶやきながら到着したのは、これまた白い扉。その中央には『SETU』と書かれた銀色のプレートが付けられている。

扉横の壁にある半透明のプレートに手を当てると、どこからともなく、先程と同じ合成音の女性の声が響く。

『指紋照合。……指紋確認。刹様、おはようございます』

声とともに、白い扉は入口のものと同様姿を消し、暗闇に包まれた八畳程の部屋が口を開けた。

部屋に入ると同時に、暗かった部屋の壁面が発光し、それとともに背後の空間に再び扉が姿を現した。

「ターナ、状況を」

刹の声に反応し、何も無かった空間に女性を映すディスプレイが出現した。

エア・ディスプレイと呼ばれるそれは、物質に重ならなければどこにでも出現させる事が可能な、質量の無いテレビと言ったところだろうか。

ただし、電波が著しく乱れる場所では扱えない。

ディスプレイに映る、短く切り揃えた青色の髪の女性、ターナは刹の指示に従っていくつもの小型ディスプレイを空間に広げた。

それは退治依頼から協力要請、依頼達成に伴う報酬表など様々。部屋に唯一置かれた白い一脚の椅子に腰を下ろすと、フカフカの背もたれに体を預け、それらに目を通す。

「退治依頼も日を増す事に減ってきているな。退治屋家業もそろそろ引退、かな？」

隠居を告げる刹に、ターナは思わず吹き出した。

「刹さんが引退？ 止めて下さいよ、そんな似合わない。生涯現役で頼みますよ？」

「生涯？ 無理だな。子供が出来たら仕事どころじゃなくなる。なにより、竜が心配するしな」

「子供？ 刹さん子供産むつもりですか？」

ターナは少々驚き過ぎな程に声を上げた。  
それもそのはず、この時代子供は産むものではなく、施設で生産するもの。クローンと言うやつだ。

そのため、刹と竜次朗のように夫婦仲良く抱き合って、子作りするような面倒な事をする者は少ない。

ジュウリクでは六割以上がクローン。コピーではないので、個体差はあるものの、親に似る部分は普通に産んだ子供より遥かに多い。何を隠そうターナもクローンタイプの人間なのだ。

「夫婦になれば、その証として子をもうける。当然の事だ。子を産むのは妻の役目でもあるしな。ターナには理解出来んか？」

「はあ、ちよつと……」。

夫婦と言うのも理解しかねます。わざわざ他人と一緒に暮らすなんて、考えただけで寒気が！」

「シルヴェルトは随分冷めた国だな……」

ターナの暮らす国シルヴェルトは、フロンティア00と呼ばれる領地解放以前人々が暮らしていた場所。今は巨大国家にまで成長し、世界全体のドミニオンホールを管理している。

シルヴェルトの人口の九割がクローン、残りがコピー。つまり、人間から産まれた人間は一人もいない。

「あの、仕事の話をしてよろしいですか？」

ターナの言葉に刹は無言でうなずくと、横幅3m、縦幅2mほどのディスプレイが出現した。

映されたのは、爬虫類の様な濃い緑の外皮、左右に三つずつある

赤い眼球、蛇の様に尖った口元から伸びる1m程の黒い舌、両手足の先にある三本の指から伸びる鋭い爪、直径3、40cmある太い尾、長さだけでも2mはある。

「ビジターの中でもラージタイプ、刹さんはよくご存知だと思いますが、ヒドウンがモルガンに現れました。すでにハンターは向かっていますか……」

ターナの止めた言葉の先に来るはずだった一言は恐らく、餌になっ  
ている、と言う感じのものだろう。

ビジターは人間を補食する。小型のタイプでも日の摂取人数は三  
桁に届く。

ラージタイプにもなれば四桁に届くどころか、放っておけば国一  
つ消しかねない。

うつむくターナに、刹は頭を搔いて立ち上がった。

「退治、すればいいんだろ？ 任せろ。そのために来たんだからな」

刹は腰に提げた銃を抜くと、高く突き上げ、高らかに叫んだ。

「さて、頼むぞ天使様！」  
ドミニオン

無機質な高層ビルが並ぶ機能美重視の街、モルガン。

ジュウリクから数千km離れたそこに刹は足を下ろしているわけ  
だが、時間をかけてようやく辿り着いたわけではない。空間転移装  
置、トランスポーターを使い、数秒でそこへ到着したのだ。

古臭いジユウリクの町でも、トランスポーターやエア・ディスプレイは普通に扱っている。

「着いたはいいが、これは……」

避難した後なのだろうか広い街には、人も動物も、更に退治屋もいない。

辺りには、先程説明したヒドウンを人間の子供程まで小型化したビジターが、十数匹チョロチョロ動き回っているだけ。

刹を見付けるやいなや、ビジターは野生生物同様襲い掛かって来るわけだが、刹は焦るでもなく、ビジターに銃を向けるとエネルギー弾を撃ち出し、一匹、また一匹、消滅させていく。ドミニオンから発射させられる青白いエネルギー弾は、標的に接触すると同時に分子レベルで分解していく。更に都合の良い事に、人間には害が無い。そのため、乱戦になると仲間の立ち位置に気を配る必要がないのだ。

七、八匹消し飛ばしたところで、辺りのビジターが急に騒ぎ出した。

キイー、キイーと警戒する猿のような甲高い声を上げながら散りに逃げ去って行く。

それと同時に街全体を揺らしている、と勘違いしかねない程の地響きが刹の体を揺らし、ヒドウンの襲来を知らせた。

後から被さる影は、刹を遙かに超える巨大さで、その姿だけでも普通なら失神するだろう。

しかし、刹は恐怖に顔を歪める事もなく、振り向くとヒドウンに銃口を向けた。

赤い瞳がギョロギョロ忙しく動きながら、刹を見つめる。

「悪いが私は不器用でな、気の利いたエスコートは出来ない。代わ

りと言っではなんだが、なかなかのランチをくれてやる」

ドミニオンのトリガーを強く引くと、エネルギー弾がヒドウンの顔面に向けて発射された。

「ちよいと胃がもたれるランチだが、たっぷり味わってくれよ!」

《続く》

中 ビジター（後書き）

聖書なんかで天使階級を知ってる方は、なんでドミニオン？ と思われるでしょうが、響きです。知らない方に説明してお

きますが、ドミニオンの階級は中の上です。能力的に言えばタイトルになるほどの存在ではありません。しかしながら、なんか偉い天使、みたいな感じしませんか？ しない？ そんな人は廊下に立つてなさい！ 作中、漢数字と英数字をこっちゃんに使ってますが、施設名、体長、距離、セリフが英数字です。未来的なものには英数字です。後付け理由ですけど、それが何か？ 結局こっちゃんです。

最初に書き忘れましたが、刹は外見が幼いだけで、20はとうに超えています。立派な大人です。これは後付けじゃありません。

後 産声（前書き）

今更ですが、サブタイはあまり意味はありません。深く考えないで下さい。

## 後 産声

青白い光はヒドウンの顔面を直撃した。　　と思いきや、接触の瞬間発生した赤い障壁がエネルギー弾を消し飛ばした。

大小問わず、ビジターの持つ能力、エネルギーフィールド。

物理的な運動を遮断するため、対人兵器は全て無効化する。そこでエネルギー弾の出番なわけだが、いかんせん、ヒドウンの持つフィールドは、エネルギーすらも無効化する優れもの。

ただ、全く効かない、と言うわけではなく、あくまである程度遮断するだけ。　　下手な鉄砲ではないが、数を撃てばいつかは当たる。

「まあ、予想通り。でも残念だな。昔と違って、ドミニオンも進化したからな」

ヒドウンの繰り出す引つ掻きに対し、まるで子供の相手でもするがごとく余裕で立ち回り、それらを回避していく。

爪先が触れた建物は、容易に切り裂かれ、次々倒壊していく。そんな状況を目の当たりにしても尚、刹の表情は焦り一つない。

「そろそろ相手も飽きたし……」

刹はドミニオンの銃身上部にある、銃口側に向けて倒れている、長さ10cm程のレバーを手前に勢いよく引くと、銃口に光が収束しはじめた。

腰を落とし、片膝を付いて構えるが、当然ヒドウンは止まる事はなく、襲い掛かってくる。

「ヒドウン相手は、やはりめんど、」

舌打ちした瞬間、死角から襲うしなやかな尾に叩かれ、地面に体を転がした。右半身を走る痛みに耐えながら立ち上がると、ヒドゥンはすでに目の前で口を開けていた。

食いつき掛かる瞬間、刹後に大きく跳び回避したが、体を襲う痛みからつまずき尻餅を付いて倒れた。

「……ハア！ ……ハア！ こんな、事なら、竜にもっと、相手してもらえば……」

弱気になりかけた自分に気付き、奥歯を強く噛むと、今だ光を集めるドミニオンに目を向けた。

「こいつがまだ、ヒドゥンを、倒したがってるのに、退治屋が弱気になって、どうする！」

飛び掛かるヒドゥンに、右腰に提げたもう一丁のドミニオンを左で抜くと、トリガーを引きながら横に跳んだ。

弾を発射する反動に合わせ、体は大きく横に跳び、更にヒドゥンに向かった弾はフィールドに弾かれながらも、ヒドゥン自体を強く押し、後方に飛ばした。

「……まだか！」

光が収束するドミニオンに目を向けた時、駆け寄って来たヒドゥンが甲高い叫び声を上げた。

「くそっ！」

左の銃口から放たれる弾は容易に弾かれ、ヒドゥンの突進を防ぐ

には至らない。

ヒドウンが右腕を振り上げたその時、収束していた光がいつそう強く輝き、準備完了を知らせた。

「あの世でネズミでも追い掛ける！ トカゲ野郎！」

ヒドウンに向けたドミニオンのトリガーを引くと、青白い収束光線が発射され、ヒドウンに襲い掛かった。

光線はフィールドを貫き、ヒドウンの頭部をかけらも残さず消し飛ばした。

「……死んだ、か？」

右腕を振り上げたまま動かないヒドウンを見ながら、少しずつ後に下がる。

刹の嫌な予感通り、ヒドウンの頭部は超高速再生された。

「こんな再生の仕方、はじめて見る。亜種か？」

ヒドウンは多少再生能力を持つが、それでも頭部を飛ばされて生きていく個体は存在しない。

完全な化け物相手に、少し口元を緩めるが、表情は焦りの色が強い。

「どうする？ 考える。」

「まだ手は……」

再生後のヒドウンは神経を全て繋ぐまでの間、僅かにだが動きを止める。

「再生するにも、再生の命令を下す器官があるはず。頭部以外のことか、か」

神経を繋ぎ終えたのか、ヒドウンの瞳がギョロリと刹に向いた。それに対し刹は、臆す事なく、ドミニオンを構え、薄ら笑いを浮かべた。

「そこを撃ち抜けば。やるしかない!」

腹の底から発したヒドウンの叫び声は、大気を振動させ、遠くの木を揺らす。そんな中であって、刹はドミニオンを構えたまま微動だにしない。

叫ぶのを止めたヒドウンは刹を見ながら、動きを止めている。後に見える尾だけが、鞭のようにしなり、地面を叩き、土埃を巻き上げている。

その行為の意味するところは、警戒、恐怖。

ヒドウンは先程頭を吹き飛ばされた事で、怯えているのだ。

生物ならどんなものでも、絶対的な力を見せ付けられれば怯えるもの。それでも尚、襲い掛かって来るのは人間くらいのものだ。

「怯えてるのか？」

「ははっ！ なかなかどうして、可愛いところがあるじゃないか！」

刹の笑い声に、ヒドウンは体をびくと震わせ、首を下げると、一歩退いた。それに合わせて刹は一歩前が出る。

こんな時こそ、慎重に動かなければならない。

こちらが大胆に動けば、逆上して大暴れされ、おしまいだ。

刹は先程の様にドミニオンのレバーを引き、ヒドウンと睨み合った。

「さあて、良い子だから大人しくしてろよ」

刹の取った行動に危機感を感じたのか、ヒドゥンは大きく跳び、のし掛かってきた。

「堪え性が無いヤツだな！ 竜みたいだっ！」

のし掛かりを避けるため、体を動かそうとしたが、足が動かない。尾に叩かれた、あのたつた一撃で動きを鈍らせる程ダメージを受けている事に、刹は今更ながら気付き舌打ちした。

「たかだかヒドゥン相手に、やられてたまるか！」

のし掛かられる寸前、ようやく足が動きとつさに回避したため、押し潰される事はなかったが、着地したヒドゥンの右後ろ脚に、刹の左足首から先は踏み潰されてしまい、尻餅をついた。

「っ！？ くっ！」

右後ろ脚に左の銃口を向け、数発撃ち込むと、驚いたのか、ヒドゥンは大袈裟に跳びのいた。

左足首を引き寄せると、折れた骨が足袋から突き出している。ただ、痛覚が麻痺しているのか痛みをまるで感じなかった。

顔を上げると、低くうなるヒドゥンがこちらを見ている。

様子を見るようにゆっくり近づくヒドゥン。

そして、ようやく収束を完了したドミニオン。

ヒドゥンが襲い掛かる瞬間、銃口を向けトリガーを強く引いた。

先程と違い、低姿勢からヒドゥンが襲ってきたため、放たれた光線は全身を包んだ。

「一気に、消し、飛べ！」

願うように叫ぶ刹に答え、ヒドゥンは消滅した。

「や、やった……か」

仰向けに倒れると、懐に忍ばせていたストップウォッチのような形状の端末を取り出し、上部のボタンを押すと、それと同時に目の前にエア・ディスプレイが現れ、ターナが映し出された。

「ターナ、依頼、完了……だ」

それだけ告げると、刹は目を閉じた。

「刹、さん？ 刹さん！？ 空間座標確認！ トランスポーター起動します！」

ターナの声が聞こえると、刹の体を光が包み込むと次の瞬間、その場から刹は消えていた。

刹は窓から差す光に目を覚ますと、体の節々に痛みを感じながら、なんとか起き上がった。

あんな事があった後の夜も、竜次郎はいつものように刹を組み倒し、されるがまま、一晩中相手をさせられた。いや、あんな事があれば尚の事、生きている実感を味わうため体を重ねたのだろう。

そんなわけで、やはりこの日も、着物の前は開けっ広げたまま。

「こつ毎日されては、引退する日も近いな」

下腹部に手を当てながらつぶやくと、包帯を巻かれた痛々しい状態の左足をいたわり、片足で立ち上がるうとした瞬間、これまた昨日と同じく素っ裸の竜次郎が後から抱き着き押し倒し、仰向けにひっくり返すと、両手を押さえ付けた。

「コラ！ 離せ！ 朝の支度を！」

「刹、こんな何の取り柄も無い俺の子、産んでくれるか？ お前のクローンじゃなくていいのか？」

いつもふざけた事ばかり言う竜次郎が、いつにない真剣な表情で刹を見つめながら言った。

あまりに真っ直ぐな目で見られ、真面目に答えるのが気恥ずかしく感じたが、その真剣な瞳に刹は優しく微笑んだ。

「……当たり前だ。私は竜の妻だぞ？ 子を産むのは妻の役目だ。それにクローン生産するものじゃない。子は天使だと言うくらいだからな、少しくらい出来が悪くても構わないさ」

「それはつまり、俺の出来が悪いと？ 優しくしてやれば、随分と言ってくれるじゃないか！」

今日は休みだから一日中相手してやるからな、覚悟しろ！」

「私は休みじゃな、んぐつ！？ んつ、んー！」

数カ月後。凄腕と呼ばれる一人の退治屋が引退した。  
子供が出来たので辞めさせてもらおう、と言う今まで聞かされた事  
のない引退理由に、誰もが啞然としたとかしないとか。

天使の産声<sup>ドミニオン</sup>

終幕

後 産声（後書き）

タイトルには、銃が完成しビジターに反撃しはじめたと言う意味と、最後、子供が産まれた事の意味の二つを掛けてはいますが、わかんなかったですよね？ 別にいいんですよ。 自分の書きたい事をタラタラ書くのは楽しいんですが、そんな事だと評価されません。 皆さんは気を付けて下さいね！ 私にはタラタラ書きますので、もし、あれ？ 少し面白いよ？ と思って頂ければ幸いです。

こりもせず和風ものまた書くでしょうが、その時はよろしく！

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8229d/>

---

天使《ドミニオン》の産声

2009年6月23日00時32分発行